

氏名	松 本 伸
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1473 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和59年 6 月30日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当）
学 位 論 文 題 目	肺葉 Sleeve 切除術後の長期生存犬における気管支・肺の形態学的研究
論 文 審 査 委 員	教授 折田薫三 教授 小川勝士 教授 木村郁郎

学位論文内容の要旨

10頭の実験犬を用いて、左肺上葉の sleeve 切除を行い、気管支形成術と肺動脈形成術を施行した。その長期生存後の吻合部気管支及び末梢肺組織の形態学的研究を行い、次の結論を得た。

1. 吻合部気管支粘膜では、粘膜上皮細胞に背丈の不揃いがみられたが、上皮の連続は円滑で、線毛の形態にも特に異常はみられず、末梢肺組織にも形成側と非形成側に差異は認められなかった。
2. 吻合部気管支軟骨に変性壊死を認めた例（3例）もあったが、これは吻合方法や、縫合糸の張力と関係があると思われ、手術の操作上注意を要するものと考えられた。
3. 吸収性縫合糸 Dexon の吸収は良く、異物反応や炎症反応はみられなかった。

以上より、気管支動脈を切離し、気管支と肺動脈の形成術を同時に行った場合でも、吻合部の治癒状態は良く、微細形態学的にも修復は良好で、本術式の適用を支持する結果であった。

論文審査の結果の要旨

肺悪性腫瘍の外科では、根治性と機能温存という相反する術式が要求され、気管支切除と形成術が必須である。本研究者は、形成術後長期間を経過した吻合部や肺組織についての研究がなされていないことに注目し、成犬10頭を用いて左肺上葉の sleeve 切除を行い、気管支形成術と肺動脈形成術を施行し、気管支吻合部を中心に、内視鏡、走査電顕を含めて詳細に検討し、吻合方法、縫合時の張力などにつき重要な知見をえてい

る。臨床的価値は高く、本研究者は医学博士の学位を受ける資格ありと認める。